

マルチニェルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.19 原点

かぬきやま
香貫山という小さな山の麓にある小さな市立の中学校、
そこで筆者は最高の教育を受けた。

何しろ文武両道が基本だ。体力がない奴に勉強ができるはずがないという信念の下、朝っぱらから運動場5周、放課後も運動場5周が義務づけられていた。走るのが大嫌いだった筆者でさえ、3年生になったら全国体力テストの平均を上回ったぐらいだから、日々の訓練というのは素晴らしい。

自立、自律ということも教え込まれた。朝礼で、ばたと倒れるのは許されなかった。曰く、「人は倒れる前に、『あ、自分は倒れそうだな』と分かるはずだ。だったら倒れる前にしゃがみ込め！我慢したってどうにもならん。己を知れ！」

勉強も厳しかった。受動的な授業は許されない。質問をされたら、まず手を挙げる。「指されて不幸にも分からなかったら、『分かりません』と言って座ればよろしい。とにかく手を挙げること」が、これまた義務のようだった。どれだけ自主学習したかを記録して提出するという決まりもあった。全然やっていないのに、「英語3時間」なんて書き続けたら、見事にばれた。塾なんてなかったし、あまり嘘をつき続けるのも恥ずかしいので、おのずと勉強するようになった。

生徒たちにM女史と呼ばれていた女性教師は、厳しい先生として恐れられていた。担任の先生になっちゃったときは、どうしよう、と青ざめた。当時、30代前半だったろうか。大柄で、ボーイッシュで、真っ赤な口紅をして、「あしはらーっっ！おまえ、軽々しく『世間がこう言う』なんて言うんじゃないっ！おまえは世間代表か？『私が』と言え、『私が』と！」と叱られたことがある。以来、筆者は「世間が……」という物言いを口にしたことがない。

どんなに厳しくても、なぜか、みんなM女史が好きだった。彼女には責任感と愛があった。M女史が忘れ物をした生徒に家まで取りにいかせたことを、保護者会で取り上げ、文句を言った親がいたらしい。「授業中にそんなことをさせて、交通事故にでも遭ったらどう責任を取るんだ！」と。筆者の母の証言によれば『『そのときは私が一生面倒を見ます！』ってM先生が言ったんで、黙っちゃった』そうなの。

何か罰を与えるときは「運動場5周」と決まっていた変な学校で（4人組の連帯責任制。誰かが宿題を忘れたら、さらに5周追加、なんて全然合理的ではなかったが）、失敗したら先生も同様に走った。何があったかは忘れたが、M女史も一緒に走っているのを見て溜飲を下げた、そんなかわいい時代だった。

今、筆者にまがりなりにも「教養」というものが身についているとすれば、M女史に負うところが大きい。学校には「必読図書」という習慣があり、毎月必ず2冊ほど本を読んで、感想文を提出しなければならなかった。おかげで読書の習慣がついたが、華道が好きだったM女史は、日本の伝統文化、古典以外にも、トーマス・マンダのルールケだのといろいろ語ってくれた。シベリウスだ、ルキノ・ビスコティだと知れば知るほど面白く、本も読んだしレコードも聴いた。

人生の最初のころ、まだ10代の3年間。思えば、自分の一切の原点がそこにある。筆者がちょっとやそっとじゃ倒れないのは、しゃがむことを知っているからで、こうして原稿を書けるのも、「己を知り、信じる道を行く」という精神が身に染み付いているからか。いまだに、走るの嫌いだ。

「あしはらーっ！」と笑顔で叱ってくれたM女史の顔が、今、まぶしく思い出される。



©Emi